

一、二、三人称視点のことばに等しく価値を見出して研究しよう

企画責任者：諏訪正樹(慶應義塾大学)

話題提供者：榎本美香(東京工科大学) 山内朋樹(京都教育大学)

指定討論者：土屋俊(大学評価・学位授与機構)

1. はじめに

ことばはコミュニケーションの手段として社会的に意味を共有するためのメディアである。それをことばの第一義的機能とする考え方は根強い。言語学、社会学、認知科学、心理学分野で行われてきたことばの研究の多くは、その側面に焦点を当てたものである。たとえば、言語発達や学習、認知言語学に属する研究は、ひとが生きる中でことばの意味を学習し、社会で使い、あるいは新しい意味を社会的・文化的文脈のなかで醸成するさまを探究する。相互行為分析、会話分析においては、観察対象となるひとびとの発話を構成することばは社会的に共有されたルールに基づいているものとみなされ、それに基づき分析がなされる。小、中、高校から大学に至る教育実践においても、他者に意味が明確に伝わるよう、考えをまとめ論理的に文章を組み立てたうえで話し、書くことが奨励される。

学問や教育で重要視されてきたこの種のことばの機能や側面を、客観的・社会的効用と称しよう。客観的・社会的効用はひとびとが互いに交流し、コミュニティ・社会を形成し、意思疎通したり論を交わしたりする上で欠かせないものである。

しかしながら、ことばの効用は客観的・社会的なものだけなのだろうか。「客観」を別のことばで表すならば「三人称視点」である。わたしたちは生きていく上で、三人称視点のことばだけではなく、主観的な内なることばも大いに駆使している。世界で出逢うものごとに触発され、あれやこれやと考えをつくりあげる途上では、内なることばをとりあえずメモに書き殴ったりする。

内なることばは人生背景に彩られた個人固有の意味合いをはらみ、主観的である。頭を去来したりメモとして書き殴ったりしたことば群はときに散らかっていて必ずしも論理性はなく、その意味は必ずしも他者に伝わりやすくない。だからといって、その種のことばに機能や役割がないわけではない。暗黙性の壁に阻まれて探究が進んでいないだけで、実は大きな効用があるはずだと我々は考えている。本WSは内なることばの効用を探究することの重要性を説くものである。

2. 思考の展開を促す内なることばあれこれ

2.1 外的表象(ことば、図、スケッチ)の研究

認知科学分野では1980年～90年代を中心に、外的表象化に関する研究が盛んに行われた。ひとは直面するさまざまな問題に対して理解したり思考を巡らしたりするために、(頭のなかで考えるだけでなく)メモや図やスケッチを外的に表象することを頻繁にする。「内的な表象」と比して、それらのメディアは「外的表象」と呼ばれる。

外的表象を残す理由は、すでに頭のなかで得た確固たる思考・アイディアを備忘録として(短期記憶的な助けとして)設けるだけではない。むしろ、書いたことばや図やスケッチが思考を巡らせたり展開させたり、新たな気づきを得たりすることを促してくれるからであるというさまざまな証例が数多く議論された。

特に、デザインスケッチの研究は外的表象の効用を雄弁に物語る。デザイナーは考えやアイディアが未だ曖昧模糊としたうちから、とりあえずスケッチ要素やことばを紙の上に描き残す。ことばやスケッチ要素を残すときにはある種の意図は有しているが、紙面上に描かれた途端ある種の大きさ、形などの属性を有し、過去に描かれた要素やことばとの関係も有する。しかし、デザイナーはそれらの多くに着眼はできていない。そして後になって、自身が描いたスケッチ要素の属性や要素間の関係、そして複数のことば同士の関係についてふと着眼するに至り、それが思考やアイディアを進めるきっかけになることを示す事例が多々報告された(Suwa & Tversky, 1997; Schon, 1983)。

この種の外的表象は、ことばであってもスケッチ要素であっても、他者に伝えるためのものではない。曖昧模糊としており、本人でさえも後になって理解できなかつたり、あるいは過去に意図した思いを無意識に塗り替えて解釈したりする。この種の外的表象をここでは「内なることば」と呼ぶことにする。スケッチなどのビジュアル媒体も含むため、「ことば」という文言は比喩的である。

内なることばは自分のためのものである。思いついたら、とりあえず外的に書き残し、異なる時間帯に書き残した多数のものごとの関係性を後から発見したり、過去に書き残したものごとの意味や解釈を後から勝手に修正したりしながら、思考

を巡らせ、展開し、新しいものごとに気づくための「思考の展開ツール」なのである。

2.2 一人称視点とは

内なることばは、一般的他者に情報共有するに耐える客観性や普遍性はないし、好意的他者だけには理解してもらえないようなものでもない。実に「一人称視点的」である。

一人称視点での観察・記述とは、自身を取り囲む世界と自身の心身のあいだに何が成り立っているか、どういう関わりがあると思うかを、自身の立ち位置・視点から見て、記述することを指す。その意味で、一人称視点は多分に主観的である。しかしながら、決して客観（三人称視点）に劣るものではない。外的表象の研究が示唆するのは、ひとは生きる上で、三人称視点だけではなく、一人称視点を積極的に駆使しながら感じ、考え、連想し、思考を展開させるということである。

たとえば、庭園で有名な寺院を訪れたとき、庭園に面する縁側に腰掛けても特に居心地の良さを感じなかったのに、少し奥まったところにある、特段美しいものがなさそうな廊下に佇んでみると、ふと安らぎを覚えたでしょう。この廊下の周辺の何がそうさせるのかについては、即座には言語化できないものである。しかし、環境に存在するものごとと心身のあいだに何が生起しているのか、どんなかわりあいをしているのかを外的表象（ことばやスケッチ）として描きのこすことを続けていると、暗黙性の高い自身の居心地の成り立ちが次第に顕在化してくる。まさに一人称視点の「内なることば」である。

その種のことばを駆使すると、自身の身体感覚を研ぎ澄ませたり、連想を羽ばたかせたり、新しい変数に気付いたり、思考を展開させたりすることが促されるのである。

2.3 居心地探究の研究におけるスケッチやことば

諏訪（2022）は暗黙性の高い居心地なるものごとを探究するため一人称研究を詳細に報告している。居心地認知を探究する場として選定したのはカフェである。カフェを訪れると、

1. カフェ空間の全体の間取り（平面図）を大まかに描き、座った席から見える店内の設えやデザイン、そして窓や入り口からみえる店外の風景など、さまざまなものの配置、形、位置関係、店外で生じる世界の動き（自動車、自転車、歩行者の動きや、太陽や電灯などの光がつくり出す陰影、風が生み出す樹々の揺れなど）に着眼し、何に着眼しているかを記述する
2. その着眼が自身の心身にどういう意味・解釈をもたらしていると思うかも記述する
3. 1の着眼や2の意味・解釈の総体として、自身はこの場でどういう経験をしていると思うかを記述する。「経験」とは、1や2に思いを馳せたときに連想される妄想的なものごとをも含むものとする。

1, 2, 3を諏訪は、それぞれ、事実記述、解釈記述、経験（妄想）記述と称している。この3種類のものごと混在させて記述する手法のことを「写真日記手法」（諏訪ら、2015）と呼ぶ。「写真日記手法」は建築領域で藤井らが開発した手法であることは（諏訪ら、2015）にも明記されている。

各々のカフェにおける記述量はかなり多い。通常論文などの媒体で使用するフォント数で、A4で1~3ページに亘る文字数である。

諏訪が23のカフェを訪れて記述したデータを基礎データとして、各々の写真日記記述から、居心地に関わるかもしれないと思える意味単位をエッセンス（生タグと称する）として抽出した。23のカフェの基礎データから329個の生タグが抽出できた。

この生タグ群をKJ法により整理分類した結果、2段階の一般化を経て55個の表札群を得た。それらは、諏訪がカフェ空間においてどのようなものごとに意識を向け、どのように空間に佇み、楽しんでいるかを示す55通りの方法に該当する抽象度であると判断し、それらを「居かた」と称した。紙面のスペースの関係上、その詳細は諏訪（2022）に譲る。

図1は、2017年12月29日に藤沢駅近くのカフェで記述した写真日記記述（1697文字）の中盤を抜き出したものである。下線部は「事実記述」（上記の1）、色網掛け部分が「経験（妄想）記述」（上記の3）、そしてそれ以外が「解釈記述」（上記の2）である。

「事実記述」はそのカフェやその周りに存在する客観的事実に着眼した観察記録なので、三人称視点的な記述である。世界状況の全てを記述するのではなく、記述するものごととは着眼という本人のフィルターがかかっているため、着眼行為そのものは主観的（一人称視点）である。一方、「解釈記述」や「経験（妄想）記述」は一人称視点での自身と世界のかかわりの様に相当するので一人称視点での記述である。

このように「写真日記」手法は、少なくとも一人称視点と三人称視点を併用する記述方法である。

(前略) 外から中まで貫く丸太カウンターや、テーブルや中庭や、全てが、木をそのまま生かした素材でつくりこまれているので、柔らかいナチュラル感が満載である。ほっこりする。ホテルというコンクリートに囲まれていることを忘れる(ある意味ここだけ異世界)。ガラス窓側の高テーブルの頭上には、枯れ木を乱雑に真ん中で縛った飾りオブジェと鳥かごが天井からぶら下がっている。←

□中庭の前の高い塀と観葉植物の上から差し込む(そちらが南側)光が、丸太カウンターの上に奥行き方向に忍び寄っている(真ん中くらいまで)。僕の目には光は入らないが、光が空間の一部に入り込み支配していることが実に楽しい。丸太に光が当たることで、本当は重量感がある丸太が軽さを生み、また自然の中に放置されている感覚を醸し出す。ガラス窓を貫いているので視線を中庭に誘導する役割も果たすし、外からの光を導き入れる存在でもある。この貫通がカフェの全てを支配しているのだ。豊かな自然の中に、コンクリートの構造でこじんまりした容れ物をつくり、近くの森から全てを切り出して造られたカフェであるかのようだ。藤沢の煩雑な駅前路地であることを忘れさせる。森と水が豊かな島に流れ着いたら、こんなカフェがあった！みたいな妄想にかられる。(後略) ←

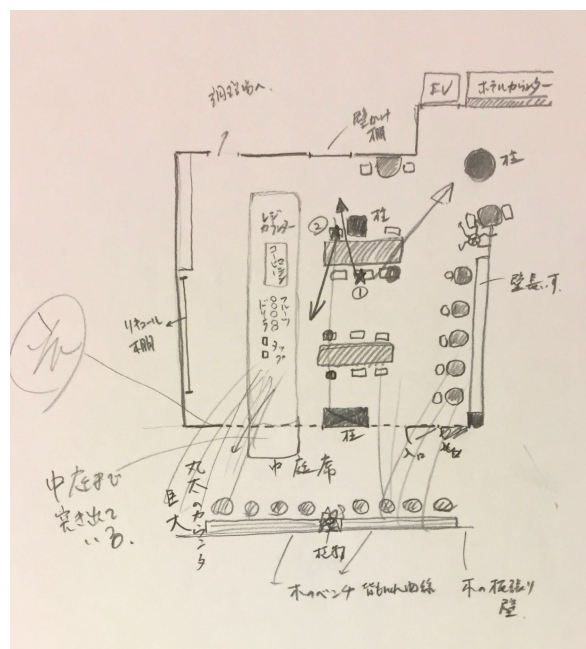


図1：写真日記の事例 (2017/12/29, 藤沢市のカフェ)

図2：藤沢駅近くのカフェで描いたスケッチ

図2はこのカフェで描いたスケッチ(平面図)である。平面図的なスケッチに、諏訪が着眼したものとを示すアノテーションや矢印などが描きこまれている。

一般に、空間のスケッチを描くときは、空間に存在するさまざまなものの属性(形、大きさ、テクスチャなど)や位置関係に詳細な目を向けざるを得ない。隣のモノとの位置の一致やずれ、大きさなど、さまざまなものごとに意識を向ける結果、あたかも自身が空間のあちらこちらに「直に触れて、その性質を感得する」心地になるものである。だからこそ、空間の中に居てただ漫然と眺めているだけでは感得しようのない詳細な属性や位置関係に着眼することになる。その着眼は他でもない自分独自のものである。自分ならではの着眼を得て、自分ならではの気づきを得て、自分ならではの意味解釈を得たり妄想を膨らませたりすることが可能になる。

一人称視点のことはやスケッチは、自分の心身が世界状況のなかに放り込まれたとき、「その日の自分ならではの(状況への)反応のしかた」を顕在化するメディアであるということができよう。世界状況×その日の自分の心身×一人称視点のことはやスケッチを書くという行為の3つ組が揃って初めて、居心地のような暗黙性の高い知の姿がぼろっと記述の網にかかり、分析を経て顕在化する。居心地探究の結果として抽出できた「居かた」は、そういった知である。

2.4 二人称視点のことは

本発表で更に焦点を当てたいのは二人称視点のことはである。二人称視点の重要性は、昨今、特に臨床心理、看護・介護、保育の分野で叫ばれている(佐伯ら, 2017)。一般に、コミュニケーションの難しさは相手の心の内が完全には把握できないことにある。たとえば、子どもの言葉や仕草は何らかの意思表示であるが、担当保育士でさえその裏側にある意図・感情は完全には掴めない。

二人称視点に立つとは、完全にそのひとの立場や気持ちになり切ることにはできないものの、相手のことはや表情や仕草を手がかりに相手の意図や感情を推しはかることである。推測が正しいとは限らないので、二人称視点のことはもまた、ことはを繰り出す側の主観であるには違いない。しかし、特別の間柄であればあるほど、たとえば担当保育士は他の保育士に比べて二人称視点に立てる確率は高い。

3. 作庭現場のフィールドワーク

本節は、2020年4月6日から足かけ一ヶ月、京都府北部の福知山市に鎮座する観音寺の塔頭、大聖院庭園でおこなわれた

作庭工事のフィールドワークにもとづくものである。京都の作庭グループ、古川三盛を筆頭に、職人たち数名による新規作庭工事である。

ぼくたちが庭を見るとき、当たり前だが、庭はすでにできてしまっている。すでにできている庭を前にして石や地形や植栽が織りなすかたちを見ることになる。とはいえいくら見つめてもよくわからない。そこで受付でもらったパンフレットを開いてみると、あの石組は亀でこちらは鶴、あるいは蓬莱山や虎の子渡しだと書いてある。そこには石の由来や作者の人生や時代背景が記してあることもある。それらを読むと、たしかに庭や石組をそのように見ることもできると思う。けれども、本当にそうなのだろうか？

ぼく（山内）が作庭現場のフィールドワークをおこなったのは、こうして石組を画像や故事に還元し、庭を庭師の人生や当時の歴史の挿絵にしてしまうよりも先に、庭師たちがどのようにして庭をつくっていくのか、庭のかたちはどのように決定されていくのかを詳細に見てみたかったからだ。

そこでフィールドワークでは、石がどのように配置されていくかを克明に写真に撮り、動画に撮り、スケッチをし、古川三盛という親方と複数名の職人たち、それに施主の住職の言葉のやりとりや身振り手振りも含めて記録した。

この現場には設計図がなく、石は即興的に据えられていくのだが、この即興性を成立させるために親方は特有の言葉づかいをする。たとえば最初の石を据えるに際して発された「ちょっとそこ掘ってみてよ」。この現場では、この古川の「てみて」という表現をよく聞くことになる。「動詞テ形+みる」という試行を表す「てみる」。この「てみる」は、主体が動作を行う段階ではどのような結果・影響が生じるか明確でないまま、試みに動作を行うこと「結果・影響がどうかかわからない状態」で、それを確かめる目的をもって意志的な動作を行うこと（日本語記述文法研究会編、2009）だ。

こうした試行を意図する「てみる」型の依頼によって職人たちは試みに地面を掘り、物を置き、判断する。親方は石を敷くときもその高さをどれくらいにするかについて、「どっちがいいやろ？ 下げるのと下げないのと」と職人に相談し、さらには「置いてみて」と石を置かせて、追加の判断を下す。

つまりこの庭づくりのなかで、古川のなかに事前に決定済みの完成形のイメージがあるわけではない。古川はつねに言葉や身振りをとおして、職人たちに半ば相談しながら、事物の複合性と、そのまわりに組織される道具や行為の連鎖全体を調整していくのであり、試みに構成した仮置き物の配置を確認しながら次の手を決定していく。

本発表ではこうした職人たちの言葉や身振り、あるいは庭の変化を検討することで、ものづくりの現場がどのように進展していくかを論じる。

4. 心の中のごろごろとした感触を紡ぐ

一人称・二人称視点のことばというのは人間の認知や情動の記述であると私（榎本）は捉えている。我々は非常に雑多な情報の入り混じった世界に生きていて、その中で物事を考えたり感じたりしている。入力となる要因が多すぎて、実験的に何らかの因果関係を確認することは到底できないが、様々なことを認知しケースバイケースに物事を体験している。その体験をことばにし研究の組上に乗せる。

4.1 3人称研究を経て

榎本は実験心理学やコーパス言語学、相互行為分析といった三人称研究の手法を用いてきた。例えば、多人数会話の研究では、話し手に視線を向けられた人が次話者になるという論文を書いている（榎本・伝、2011）。これは聞き手が複数いる3人会話を12組分観察し、視線が向けられていた聞き手がどのぐらいの頻度で次話者になっているかを外部観察したものである。一般的な会話の規則性を見出すもので、三人称視点に立っている。

ただし、本当に客観的な観察だけからこの結論に至ったかという点、そうでもない。自分が見られている聞き手の立場であったら、何か反応しなければ悪い気がするという直感からスタートしている。会話分析のデータセッション中に「〇〇として振る舞っているように見える」という表現で、参加者の行動が記述されることがあるが、これも分析者自身がその参加者の視点に立てばこうしているようだ、というようにどこか二人称の視点が入っているように思う。

我々がこの分析に用いたのは千葉大学3人会話コーパスとして公開されているものであるが、大学生の親近性のある3人に雑談をしてもらうという設定で収録したものである。収録される対象としてカメラを向けられ、時給を貰いながら話すという設定は、やはりどこかぎこちないものであった。その当時から、もっと自然に発生した普段の会話を分析する方向へと潮流は流れていた。

そんな中、実際にどこかの片田舎で行われている井戸端会議を収録しようという機会があった。そこで野沢というフィールドに出会う。しかし、調査してみると、昔は源泉で野菜や卵を茹でながら会話もしていたそうだが、今では家のガスで沸

かした湯で茹でる方が簡単のため、源泉に人は来ないという。「ま、人が集まるところといえば、道祖神祭りの準備作業でしようか」と惣代さんに教わる。

そこで日時を合わせ再訪する。すると、100人近くの人が集まっており、小グループに分かれて各々が作業を始める。私が最初に見たのは、10名程度の人がテントを組み立てる場面である(図3)。「おお、これはすごい人数の共同活動場面を撮影したぞ!」と大喜びした。彼らの活動は我々の目には本当に斬新で、原生林のようなところで木を伐採して回ったり、それを手で道まで運び出したり、その木材を使って社殿を立てたり、めくるめく共同活動の数々であった。大自然の中で大人数の人が行っている相互作用が分析できると思った。

道祖神祭りは毎年1月15日、40帖ほどの広さの社殿が生まれ、それを燃やすことで終わる。猛吹雪の中、夜通しかけて組み上げた社殿が燃え落ちて行くとき、この作業に携わった人々は、神々しいばかりに誇り高らかに涙を流す。その姿を見たとき、私が分析しようとしているものは、彼らがやろうとしてきたものとは違うのではないかと気づいた。



図3：テント立て

4.2 二人称研究へ～彼らが見ているものを見る

彼らがやろうとしているのは何か?先輩に教わりながら必死で縄の結び方を覚える。仲間内で時に喧嘩し、時に笑い合う。先輩に怒られてしゅんとする。1日の作業を無事終えて安堵する。社殿が燃えるのを見て泣く。神輿を奉納し終えて泣く。彼ら自身の言葉に注意を向けてみると、祭りをやり終えることは「一人前の男になる」「一生ものの友達を得る」「村部との仲間入りをする」ことだという。単なる技術や知識の習得ではなく、何か精神的な成長とか絆とかを得ているのである。それは一体どのようなものなのか、どのようにして身につけられていっているのか、そちらに目を向けなければ、今ここで起きていることを研究したことにはならないだろう。

4.3 二人称研究の方法

しかし、精神の内側などどうやって研究するのか?外部からの観察は不可能だし、そもそも本人たち知っているものでもない。何か内側にごろごろと存在している感触であって、変化もしていく。我々の仕事は、そんな不確かな形の無いものごとばの中に摘み取っていくことである。

4.3.1 時を共にする

とにかくビデオを回し続けて、すべての作業を一緒に体験する。彼らをビデオに撮るためには、同じ地表に立っていなければならない。夏のカンカン照り、吹雪の極寒、延々と終わらない作業、襲ってくる眠気などそこに一緒に居るからこそ、得られる体感がある。テレビ局などはテレビで一瞬流す映える映像さえ収めればすぐに帰っていく。我々は、早朝の集合に集まり、日暮れの解散まで、いかに単調な作業の繰り返しであろうと側に居なければならない。そこに居て、一人ひとりが今感じていることを考える。

4.3.2 話をする

飲み会に参加させてもらって、今日のあの場面を振り返って話をさせてもらう。あれは面白かった、あれは大変だったとこちらの感想を言い出し、彼らがどう思ってその場面にかかを聞き出す。インタビューのような畏まった場を作ってしまうと、こちらの一辺倒の質問にお行儀の良い定形の返答が返ってくるばかりである。一瞬で聞きだせる本音などないのである。そのために、飲み会は非常に良い場を提供してくれる。長い時間一緒に居られるし、友人関係や誰が誰に怒られてという裏話も聞ける。コロナでここ数年飲み会が途絶えていたが、そうすると誰がどんな生い立ちなのか、それぞれにそんな関

係性があるのか全く分からなくなりました。今年、飲み会が復活してゆっくりじっくり一人のひとと話せるようになって改めて、他人の想いを聞くことの大切さを実感した。

4.4 造化随順(ぞうかすいじゆん)

松尾芭蕉は「笈の小文」の冒頭で以下のように述べている。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化に随ひて四時を友とす。見る処鼻にあらずといふ事なし。おもふ処月にあらずといふ事なし。

造化は、「天地の万物を創造し、化育すること。また、造物主」から転じて、「作り出された天地・宇宙・自然。また、自然の順行」を意味する(「広辞苑」)。西行、宗祇、雪舟、利休という異なる分野の人たちは、造化の土俵の上で万物に潜む真の光に最新の注意をはらい、それを理解しようとしているのだという「造化随順」の心を説いているという(角川書店(編), 2019)。和歌や連歌といった言葉での表現もあれば、絵画や茶道での表現もあるが、いずれにせよ、世界の核の中の真と向かい合ったものであったという意味であろう。私もコミュニケーション研究者の一人として、人間の心のあり方の真の部分と向き合いたいと思う。

5. 考察

本ワークショップは、知性・知能にかかわる多様な研究領域において、一、二、三人称視点のことばに等しく価値を見出して研究を行うことの重要性を説くものである。

- 三人称視点のことばだけを拠り所に研究しては、暗黙性の壁は越えられない
- 三人称視点なしの、一人称視点のことばだけではとかくひとりよがりになる。2.3節で紹介した「写真日記手法」は、一人称視点の「解釈記述」・「経験(妄想)記述」だけではなく、その解釈や経験(妄想)が生まれる着目のよりどころとしての「事実記述」を意識的に書く手法である。単なるひとりよがりな解釈や妄想ではなく、三人称視点のものごとにグラウンディングされた一人称視点であることに注意されたい。
- 一人称視点のことばを記述する生活習慣をつけていると、自身を取り囲む他者やものごとに対する二人称視点のことばが生まれやすくなる。昨今の一人称研究の事例にはそう示唆する証例がある

一般に、学問は世界で生じているものごとを切り出し、後世のひとが「生きる」ことに資する役割を担っている。世界で生じているものごとには、客観的な観察でないとうまく切り出せないものもあれば、暗黙知のように主観(一人称、二人称視点)をうまく駆使しなければうまく切り出せないものごともある。

特定の視点だけを以てその視点が顕在化できる側面だけを切り出して満足しては、到底、学問は世界で生じているものごとには到達できない。

実際にこの世界に「生きている」ひとの知(それは「この世を生きぬくための実践知」である)を扱う学問において目指すべきことは、さまざまな側面が複雑に絡み合い、連携しあうことによって成り立つ「生きる姿」の顕在化である。

絡み合いや連携で成り立っているものごとは、一部の特定視点で特定側面だけを捉える方法では捉えようがない。絡み合い、連携し合っている全体をまるごと捉えるためには、多様な視点を上手に混在させて探究する必要がある。一人称、二人称、三人称視点のすべてを駆使するとは、そういう主張である。

従来の学問的方法論は、とかく客観性や普遍性のみを正統なる手続であると認可し、主観や個人固有性や状況依存性は学問の蚊帳の外であるという風潮を有していた。

ひとの知を扱う学問は、「生きるひとのアクチュアリティ(生き様)」の多様な側面をできるだけ豊富に顕在化することに意識を変容させる必要があると考える。

参考文献

- 榎本美香, 伝康晴 (2011). 話し手の視線の向け先は次話者になるか 社会言語科学 14(1), pp. 97-109
角川書店(編) (2019). 俳句のための基礎用語辞典 角川ソフィア文庫
日本語記述文法研究会 (編) (2009). 現代日本語文法2—第3部 格と構文・第4部 ヴォイス, くろしお出版
佐伯胖 (編著) (2017). 「子どもがケアする世界」をケアする 保育における二人称的アプローチ入門, ミネルヴァ書房
Schon, Donald A. (1983), *The Reflective Practitioner*, Basic Books, New York.

Suwa, Masaki. & Tversky, Barbara (1997). What do architects and students perceive in their design (4): 385-403
諏訪正樹, 藤井晴行 (2015) . 知のデザイン 自分ごととして考えよう, 近代科学社
諏訪正樹 (2022) . 一人称研究の実践と理論 「ひとが生きるリアリティ」に迫るために, 近代科学社